

[資料] 埼玉県所沢市に残る 1923 年関東地震及び 1924 年丹沢地震に関する記録

栄東高等学校* 荒井 賢一・篠田 海遥

Records of the 1923 Kanto and the 1924 Tanzawa Earthquakes in Tokorozawa City, Saitama Prefecture

Ken'ichi ARAI and Miharu SHINODA

Sakae-Higashi High School, 2-27 Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City, Saitama, 337-0054 Japan

As a continued study of the Kanto Earthquake of magnitude 7.9 occurred on Sep.1 of 1923, we surveyed three diaries written on the day of the earthquake and seven stone monuments in Tokorozawa City, located in the southern central part of Saitama Prefecture. Damage of the shrines and temples, walls of storehouses, and of stone lanterns was recorded. No house was completely destroyed despite being relatively close to the epicenter of the mainshock. We also noticed the aftershock of magnitude 7.3 occurred on Jan. 15 of 1924, 4.5 months after the mainshock, called the Tanzawa Earthquake. According to the descriptions on the two stone monuments, the above diaries, and from a newspaper published as an extra, many of the buildings mentioned above that had just been repaired from the damage of the main shock were damaged again by the Tanzawa Earthquake. From those records, we judged that there was the same or stronger shaking than the main shock in the Tokorozawa City area. We are able to learn lessons about aftershocks with large shaking that occur several months after the main shock and about people who have rebuilt again by cooperating with the community despite their property being damaged by the second big earthquake.

Keywords: 1923 Kanto Earthquake, 1924 Tanzawa Earthquake, Tokorozawa City, Stone monuments, Diaries.

§ 1. はじめに

著者らは、1923(大正十二)年 9 月 1 日に神奈川県西部を震源として発生した関東地震(気象庁マグニチュード M7.9, 深さ 23km)を対象に、埼玉県に残る記録の調査を継続している。これまで、県庁所在地のさいたま市[石黒・他(2014)及び石黒・他(2015)]と、三大被災地(旧粕壁町・旧幸手町・旧川口町)が含まれる現在の春日部市[荒井・他(2017a)及び荒井・他(2017b)]・幸手市[篠田・他(2018)]・川口市[荒井・篠田(2019)]という埼玉県の南東部に位置する地域を対象として調査を進めてきた。これらの調査では、主に本震による揺れや被害、度重なる余震、復旧・復興の過程に関する記録に注目した。荒井・篠田(2019)では、これらの地域について、本震およびその直後(本震の数分後)に発生した M7 クラスの余震[武村(1999)],さらには本震の翌日に発生した余震により多くの家屋が倒壊したことをまとめている。

これらに継続する研究として、本研究では埼玉県南中部に位置する所沢市を対象地域とした。所沢市は、埼玉県の三大被災地よりも震源からの距離が小さいにもかかわらず、これまで検討されてこなかった。

そのため、これまでにおこなってきた、さいたま市・春日部市・幸手市・川口市を対象地域とした研究と被害記録などの比較検討をするべく、当該地域に残された資料の調査をおこなった。武村・諸井(2002)の推定によると、所沢市内での本震による揺れの強さは、現在の日本の気象庁震度階級で震度 5 弱程度と、三大被災地と比較すると小さかった。このため、所沢市内での木造家屋の全壊率は 1%未満(4777 軒中全壊は 1 軒)で、前述の旧幸手町(27%),旧粕壁町(17%)や旧川口町(17%)と比較すると極めて低かった(各町の全壊数の数値は諸井・武村(2002)より引用)。

また、1924(大正十三年)年 1 月 15 日には、丹沢地震とよばれる関東地震の余震(気象庁マグニチュード M7.3, 震源はごく浅い)が発生した。宇佐美(2003)によれば、神奈川県中部での被害が大きく、被害家屋の中には関東地震後の家の修理が十分でなかったことによるものが多かったという。

* 〒337-0054 埼玉県さいたま市見沼区砂町 2-77
電子メール: rikaken_sh@yahoo.co.jp

§2. 本研究で収集した2つの地震に関する記録

所沢市は、図1に示すように市境は東京都と接し、震災当時は8つの町村(所澤町・小手指村・三ヶ島村・山口村・吾妻村・松井村・柳瀬村・富岡村)に区分されていた。図1には、関東地震と丹沢地震の震央と関東地震の断層面、及び前述した埼玉県南東部の調査地域の位置もあわせて示している。

所沢市史編さん委員会(1992)には、1923年関東地震に関して、「所沢全体の被害状況は全体を把握できていない」とあるが、土蔵の被害や余震について記した3家の日記の存在も記されている。これらの日記は、被害状況を把握できる資料であると考え、調査をおこなった。関東地震当日の日記が記された3家は、図2のD1~D3に位置する。これらは、所沢市生涯学習推進センターに保管されている。「諸星新助日記」(D1)は資料原本を、「北田斧吉日記」(D2)と「鈴木源一日記」(D3)は複写版を調査した。日記の内容については§3.1に記述する。また、3家の日記

には、丹沢地震についても発生の当日に記されている。

また、所沢市教育委員会文化財保護課(2001, 2002, 2003, 2004)によると、関東地震に関して具体的な被害の詳細が記されている石碑が6基掲載されている。すでに知られている石碑ではあるが、碑文の内容についてこれまで詳しく紹介されてこなかったため、本研究ではひかり拓本の技術を用いて再調査をおこなった。石碑についてはS1~S6と略記し、図2に所在地を、表1に一覧を示した。碑文の内容については§3.2に記述する。

なお、前述の3家の日記及び石碑6基のうち2基(S3とS4)には、丹沢地震でも被害を受けたことが記されている。更に地震の当日(1924年1月15日)に発行された『武州経済通信』(複写版、鈴木源太郎家所蔵)という新聞(号外)でも、同地震の被害について言及されており、詳細は§4.3に記述する。



図1. 関東地震と丹沢地震の気象庁による震源と関東地震の断層面[Kanamori (1971)]及び所沢市を含む各調査地

Fig.1 Locations of the epicenters of the 1923 Kanto and the 1924 Tanzawa Earthquakes estimated by Japan Meteorological Agency, the source area of the Kanto Earthquake [Kanamori (1971)], and surveyed areas including Tokorozawa City.

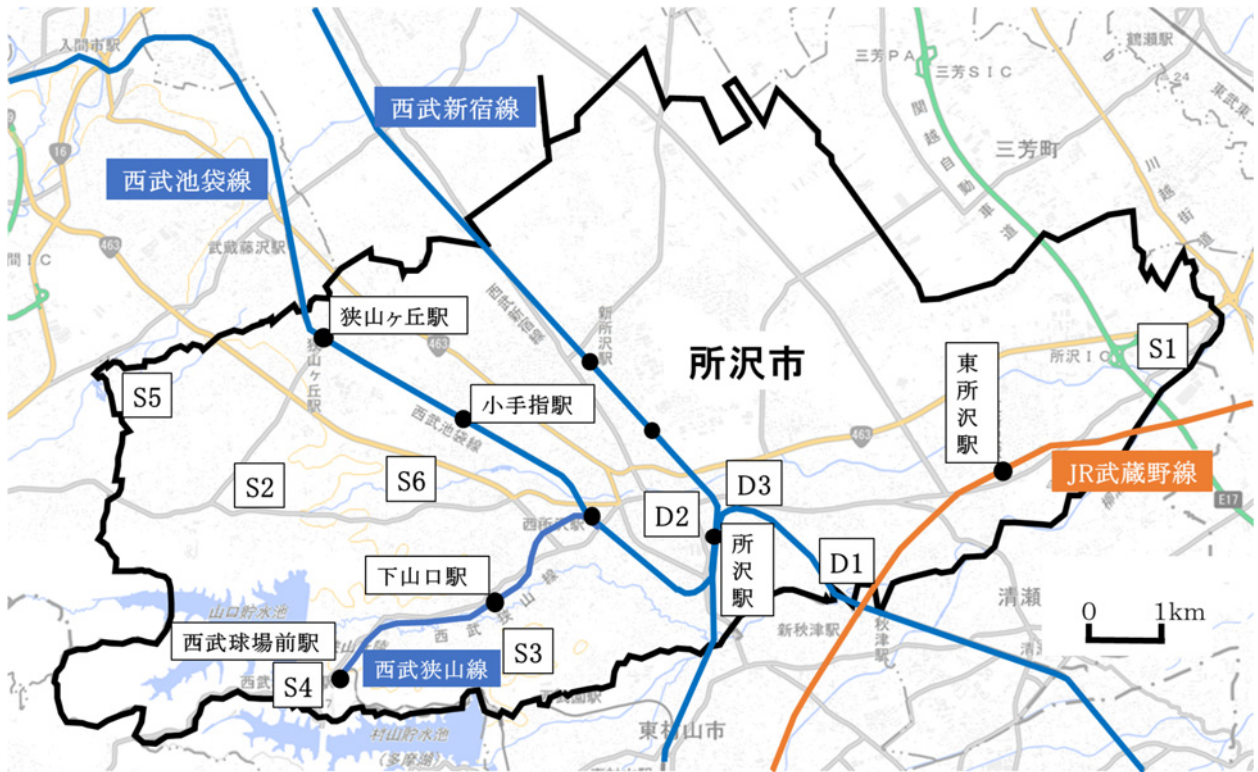


図2. 日記を記した家及び石碑の位置図及び所沢市内の鉄道の駅（地図は国土地理院より引用）
 Fig.2 Locations of diaries, stone monuments and train stations in Tokorozawa City.

表1. 図2に示した石碑の碑名・建立年・所在地の一覧
 Table.1 Information of the stone monuments showed in the Figure 2.

	碑名	建立	所在地	掲載されている文献
S1	なし	1827年	東光寺金毘羅山 (坂之下383)	所沢市教育委員会文化財保護課 (2002)
S2	震災の碑	1924年9月1日	守谷家共同墓地 (三ヶ島三丁目1134)	所沢市教育委員会文化財保護課 (2001)
S3	復興碑	1925年4月	浅間神社(荒幡748)	所沢市教育委員会文化財保護課 (2003)
S4	重修奥之院記	1925年10月	山口観音(上山口2203)	所沢市教育委員会文化財保護課 (2003)
S5	重修華表碑	1924年7月 (1926年3月改修)	林神社(林一丁目383)	所沢市教育委員会文化財保護課 (2001)
S6	石灯籠建設碑	1959年9月25日	北野天神社 (小手指元町3-28-44)	所沢市教育委員会文化財保護課 (2004)

§ 3. 1923 年関東地震に関する記録

本章では、3 つの家の日記及び 6 基の石碑に記されている 1923 年関東地震の記録について紹介する。

3.1 日記に記されている地震直後の所沢市内の状況

「諸星新助日記」(D1, 図 3)は、1906(明治三十九)年から 1924 年まで諸星新助氏によって全 33 冊にわたり記録された日記であり、市販の日記帳(当用日記)に墨書またはペン字で記されている。諸星新助氏は農業を営んでおり、震災当時は入間郡会議員も務めていて、旧松井村下安松(現在の所沢市下安松)の自宅で被災した。

当時の日記の内容については、読者の便宜のために翻刻文を作成した。

【翻刻文】

(午前十一時五十八分)

午口〔「前」を見せ消し「后」と脇書き〕十二時十分過ぎ強震アリ、家内一同庭内ニ逃レ避難ス、倉庫(元醤油所ハ北部全部土落シ麦穀所其ノ他倉庫土塗及

腰巻等ヲ落サレ居宅ハ釘ノ壁ヲ落サル)庭中ノ石燈籠(ママ)ハ全部倒レ破壊サル併シ人畜ニハ被害ナシ、其後度々強震アリ為ニ庭内ニ天幕ヲ張り夜十一時半迄外ニ居リ、后家ニ入り明方迄碌ニ寝ラズ(後略)

この日記を現代語訳し、要約すると次のようになる。

(午前 11 時 58 分)

午後 12 時 10 分過ぎに強い揺れがあり、家の中に居た人は皆庭へ避難した。土蔵の腰巻(土蔵の外回りの土を厚く塗った部分)や壁が破損し、庭の石灯籠も皆倒れたが、人や家畜への被害は無かった。その後も度々強い揺れがあり、庭に天幕を張って過ごし、夜 11 時半に家に入ったが明け方まで眠れなかった。(後略)

「北田斧吉日記」(D2, 図 4)は、1898(明治三十一年)1 月から 1924 年 5 月まで北田斧吉氏によって全 27 冊にわたり記録された日記であり、大福帳と同じ横帳に墨書でほぼ毎日記されている。北田家に伝わる話では、北田斧吉氏は毎晩就寝前 1 時間程を、日記を書く時間としていた。北田斧吉氏は震災当時、質屋業を営んでおり、旧所沢町金山町区(現在の所沢市金山町)の自宅で被災した。

「北田斧吉日記」については、所沢市教育委員会から提供頂いた翻刻文を基に原本を確認の上、読み取りの誤りを一部修正して以下に掲載する。

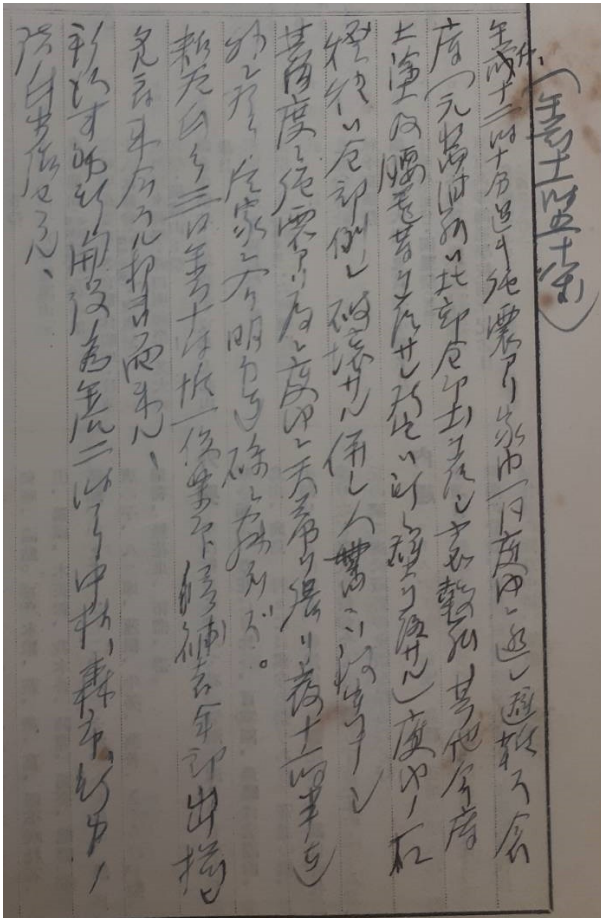


図 3. 1923 年 9 月 1 日に諸星氏によって記された日記
Fig.3 The diary written by Mr. Morohoshi in Sep.1 of 1923.

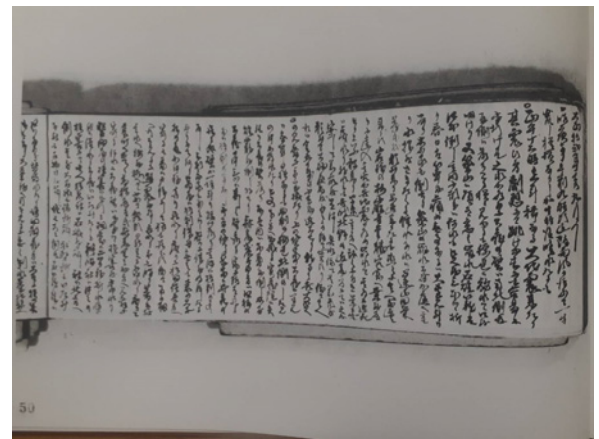


図 4. 1923 年 9 月 1 日に北田氏によって記された日記
Fig.4 The diary written by Mr. Kitada in Sep.1 of 1923.

【翻刻文】

一昨夜より午前九時頃迄降雨風の後に、一寸荒し模様なりしか、十時後晴れたるも

正午十二時近計稀なる大地震来たり、其震ひ方劇烈にて逃げ出すにも容易に歩行けず、之れか為めに土蔵の壁ハ南北側及東側ハ落ちたる様ニ見ゆるも、腰巻ハ放れて口を明けり、又築山ハ頂き悉く崩れ石燈籠も四本倒し其内小形分ハ何れも足を三本ツハ折り春日は箆を痛め無事なるハ大雪見計りなり大小家も倒せり築山の崩れ土砂か庭へ重り水掃をさまたくる惶れあれハ、早速山田栄蔵氏を頼み来る早速参りたるも直ぐに全人を迎ニ来らす岩崎の梅(ママ)巖寺重職穴倉へ桑を取りに這入其穴か此地震の為め崩れて其為に迎死せりといふ報来り、早速其方へ趣くに付き栄蔵ハ戻り、然れども此時北野の近藤方にてハ之を案して若衆を遣はし、呉れ依て其若衆を頼みて土砂庭石を少々方附て貰ひり、依て全人江ハ金五十銭の小遣を進上せり、就而は此大災の見舞に予ハ出掛たり、上の貸家の土蔵ハ一寸見ハ無事の様なるも、西側の腰巻北側のした見の中か崩れたり、又下方へ出掛る、実蔵院ハ矢張り土蔵の壁落ち本堂内ハ本尊を倒しかな燈籠を倒し為せり、斎藤常太郎方ハ四棟の土蔵の中三ツハ甚しく壁落ち家に付き居る分ハ格別の事なし、予方の貸し長家ハ井花の居る処壁か一坪計り抜け落ち其余ハ格別の事なし、三軒永家も少々ツハ壁に傷を及ぼしたる計りにてあり、宿屋ハ格別傷み無、之も表の大家根の瓦に中程イサリ居れり、戻りに杉田謹吾方へ寄るも表ハ戸締にして誰も居らず依て南の畑へ行て見るに避震を為し居れり、予も余り暑き故其れへ腰を据へて茹て饅頭の馳走に相成れり、戻りて裏町へ出て、高橋亀吉氏斎藤金之助方へ見舞に寄る、何れも土蔵壁ハ多少ツハ損害を蒙れり醤油屋の損害ハ多しと烟突ハ二間程折れ醤油ハ溢れり土蔵ハいたみたりと、神明社ハ中々の損害にて十人権現社ハ石掛を崩し社ハ北方へ倒れ其外大石掛も諸所崩し社務所もいたみ本社も石掛けを崩し垣も大ニ倒れ石燈籠ハ四ツなから皆崩れたり、増田教蔵方ハ大きに損害洩きたり、又墓所へ行て見るに悉く倒れ墓地盤割て居れり予方仏壇の本尊も倒れ御光ハ割れ図師もいためり其他高みに乗せある物ハ悉く落ちたるなり、

又昼よりもといふか昼ハ知れざるも夜ニ入東京方面を見れハ永き時間焼け居り其又焼地盤の広き事甚しく田舎にハケ様の場所の無之確に東京にて此地震か集団にての火災なるらん此変事に付き予方へ見舞人ハ斎藤理平石田辰五郎倅高橋亀吉氏杉田謹吾増田教三氏等なり、

午後より夜に至る迄十余回も揺り返し来り其内二三回激しき事もありたるも初鼻の様強くハ無えけれども、或る説に流水ハ夜半頃には数回の激しき揺返し来るとの噂にて諸人皆な戸外ニ蚊帳を釣り寝たり夫も元

昼の中所沢を廻る時諸人不残日蔭を選ミ屯し寝る者課多し夫ても夜分烈しき事ハ無えして仕舞へり

この日記を現代語訳し、要約すると次のようになる。

正午少し前に大地震がきた。激しい揺れで、逃げるに歩くのも困難であった。土蔵の壁は南北側と東側が落ち、腰巻(土蔵の外回りの土を厚く塗った部分)も離れて口をあけてしまった。庭では石灯籠4本も倒れた上、築山はてっぺんから崩れ土砂が庭を埋め尽くし、土砂が庭にたまって水流を妨げる恐れがあった。応援に来てくれた若い衆にこれらを片づけてもらい、お礼にお小遣いを渡した。その後、街中へ被害の見舞いに出かけた。上にある貸家では、土蔵は一見すると無事に見えたが、西側の腰巻や北側の下見が中から崩れていた。実蔵院では本堂内の本尊や灯籠が倒れ、土蔵の壁も落ちていた。斎藤常太郎宅では、4棟ある土蔵のうち3棟の壁がひどく破損し落ちてしまった。このほかにも、至るところで土蔵の壁が破損していた。(北田家が管理している)貸家は壁が抜け落ちたり、傷が入ったり、宿屋はとくに損傷はなかったが、大屋根の瓦が中ほどまでずれていた。南の畑では避難している人がいて、裏町の家々はいずれも土蔵の壁が少しずつ被害を蒙っていた。醤油屋も被害を受け、煙突が2間程折れて、醤油がこぼれてしまった。神明社はかなりの被害で、十人権現社は石垣が崩れ社は北側に倒れ、その外側の大きな石垣も所々崩れた。社務所も被害を受け、本社の石垣が崩れ大規模に倒れ、石灯籠は4本すべてが崩れていた。墓所へ行ってみると墓石はほとんど倒れ、地面にひびが入っていた。日中には気づかなかったが、夜に入って、東京方面を見ると長時間にわたって広範囲が焼けており、東京が地震による火災に見舞われていることを認識した。午後から夜までの間に、十回余りの余震があり、うち2~3回は激しく揺れた。本震ほど強い揺れでは無かった。夜半頃に数回激しい揺れの余震があるという噂が流れ、多くの人が屋外で蚊帳を張って過ごしたが、そのような余震はなかった。

もう1つの「鈴木源一日記」(D3)は、鈴木源太郎家所蔵である。1906(明治三十九)年から1964(昭和三十九)年まで鈴木源一氏によって断続的に全29冊にわたり記録された日記である。市販の日記帳に墨書またはペン字で記されている。鈴木源一氏は農業を営んでおり、震災当時は旧松井村助役を務めていて、旧松井村下新井(現在の所沢市西新井町)の自宅で被災した。前述の2家の日記のような詳しい記述は無かったものの、「大地震があったこと」と、「東京が大火災で悲惨な状況であったこと」が短く記されている。

3.2 石碑に記されている被害と復旧・復興

石碑調査は、2020(令和二)年1月19日、6月27日、9月8日の3回に分けて現地を訪れ、§2で紹介した6基について碑文を確認した。本調査では、碑文が多い石碑や風化が進み読み取りが困難な石碑3基(S3, S4, S5)は、奈良文化財研究所の上相英之氏等によって開発されたひかり拓本の技術[上相・他(2019)]を用いた。これにより現地で石碑1基を多方向から複数枚の写真を撮影し合成することで、その場で碑文を正確に把握できた。

石碑 S1～S6 の地震に関する碑文を以下に示す。碑文は原文のまま記述するが、ワープロで入力不可能な旧字体は、新字体で記述する。「/」は改行を表す。また、各石碑の写真を図5～図10に示す。

(S1) 大正十二年九月一日／大震災ニ付十月／十日
修膳ノ了／塩野房吉



図5 東光寺金毘羅山に建つ石灯籠(S1)
Fig.5 The stone lantern S1 built in the Toukouji temple.

(S2) 関東大震災大正十二年九月一日午前十一時五十八分／裏ニ謂レアリ
(裏面の碑文) 傍ノ／石塔ノ斜岐セルハ大震災ノタメナリ／大正十三年九月一日立之 五代 守谷澤平

(S3) 大正十二年九月一日ノ大地震ニ我ガ新富士山モ亀裂崩潰ヲ免レズ氏子等慨然／起テ復興ヲ計リ全年十二月廿四日工ヲ起シケルガ越テ翌年一月十五日第二回ノ／強震アリテ氏子等ガ折角ノ辛苦モ水泡ニ帰セリ然ニ之ガ為ニ失望落膽スル／者無ク倍々工事ヲ励ミ全年三月十日ヲ以テ竣功セリ實ニ日数三十



図6 守谷共同墓地に建つ石碑(S2)
Fig.6 The monument S2 in the Moriya grave.



図7a. 荒幡浅間神社に建つ石碑(S3)
Fig.7a The monument S3 in the Arahata Sengen shrine.



図7b. 浅間神社に建つ石碑(S3)のひかり拓本
Fig.7b The rubbed copy by light of the stone monument S3 built at the Sengen shrine.

日人夫二／千餘人而モ前ヨリ数尺高クナレリ嗚呼神徳ヤ高シ氏子等ガ協同一致ノ／効モ亦偉ナル哉

(S4)大正十二年九月一日關東地大震京濱之間被害／最劇我金乘精舎奥之院亦遭厄檀越胥謀宜加修／理稍復奮觀矣翌年一月十五日復激震尊像再倒／其慘未可狀於是東京北多摩村山出身府會議員／榎本利亮君喜捨淨財為脩復其功令全成衆歡喜／莫以加焉予謂聚沙侘塔兒戲猶有功德況於伽藍／繕修之舉乎施主家運昌盛意願滿足當無疑也因／録其篤志以傳不朽云

(S5)大正十二年九月一日地大いに震ふ相武房総沿海一帶悉く／惨害に罹れり是日本村林神社殿も儼然



図 8a. 山口観音に建つ石碑(S4)

Fig.8a The monument S4 in the Yamaguchi Kannon.

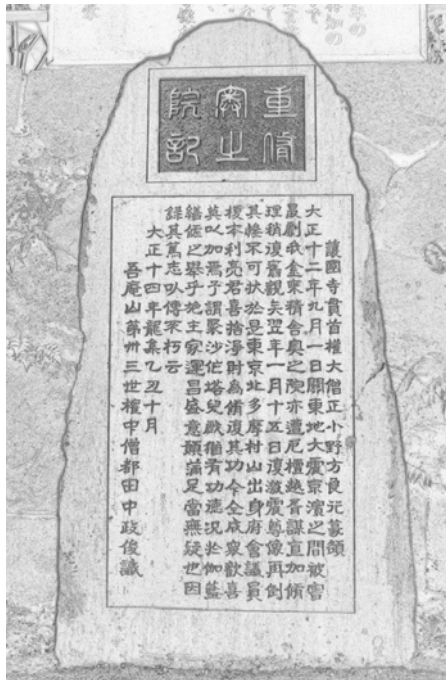


図 8b. 山口観音に建つ石碑 S4 のひかり拓本

Fig.8b The rubbed copy by light of the stone monument S4 in the Yamaguchi Kannon.

と志て動揺せず僅／に擔雷の庭砌を破壊し華表乃礎址を傾くるに過ぎず村民／亦一人の徴復を負ふ金の無く神徳威積の致す所も因果と／雖とも柳亦古人工事の注意亦興つて力ありと謂ふべく頃／者華表修補に際し来て工費を献するもの多く日ならずし／て成る特に原形を存し敢て改修を加へず聊其由を記し以／て後人に知ら志むと云ふ

(S6)大正元年北中(旧北野新田)よ／り小手指神社合祀に伴い移建し／た石鳥居が十二年の大地震に



図 9a. 林神社に建つ石碑(S5)

Fig.9a The monument S5 built in the Hayashi shrine.



図 9b. 林神社に建つ石碑 S5 のひかり拓本

Fig.9b The rubbed copy by light of the stone monument S5 in the Hayashi shrine.

よ／つて倒壊したまゝ現在に及んだ／が漸く往時を知った古老の少く／なつたのに鑑み此の程これを石／灯籠として再建し其の由縁を永／世に遺そうとするものである

石碑 S1 は、1827(文政十)年に建立された石灯籠の側面に、碑文が記されている。1923年9月1日に発生した関東地震により破損してしまい、地震から1ヶ月余り経った10月10日に修繕され、その旨が記されたものである。

石碑から読み取れる1923年関東地震による被害の傾向については、前節で紹介した日記に記されている被害状況と類似している。その中には、神社の敷地内での山崩れや石鳥居の倒壊、寺院の建物の損害に関する記述がある。一方で、住家の全壊・半壊といった被害は記されていない。

石碑 S3～S6からは、地震による破損を速やかに修繕したことや、地震による被害や復旧・復興の過程について後世に残そうという意思も読み取れる。例えば石碑 S3 には、関東地震の被害からの復興に向けて工事を進めている中、§4で記述する1924年1月15日の丹沢地震で再び被災しまったものの、誰一人として落胆せず復旧に力を注いだことが記されている。そして、同年3月10日に工事を完了したこと、氏子等が力を合わせてその偉業を達成できたことも記されている。また石碑 S6 には、関東地震当時のことを語り継ぐ人が少なくなったため、地震で倒壊してしまった石鳥居を使って石灯籠として再建し、震災を後世に語り継ごうとする意思が明記されている。

被害等の具体的な碑文が記されていないため、表1には載せていないが、石碑 S4 のすぐ近くに、3つの面に縦書きで記された四角柱状の碑が建てられてい



図 10. 北野天神社に建つ石碑(S6)

Fig.10 The monument S6 in the Kitanotenjinjya shrine.

る。正面に「関東大震災記念 大正十二癸亥年九月一日」と、関東大震災の記念に建立されたことが記されている。左側面には、「大正十三年九月一日立三ヶ島村 守谷浅五郎 七十三歳」と、この碑が建てられた年月日と建立者が記されている。また、右側面には、「雨量調記念 大正二年ヨリ 全十一年マデ」と記されている。この碑は、大正時代の震災と雨量調査の記念碑として残されている。

§4. 1924年丹沢地震に関する記録

本章では、3つの家の日記および2基の石碑に記されている1924年1月15日に発生した丹沢地震の記録について記述する。さらに、地震の当日に号外として発行された新聞についてもあわせて記述する。

4.1 日記に記されている所沢市内の揺れと被害

「諸星新助日記」(D1)には、「午前六時、強震アリ、家内中大騒キヲナス、人屎尿ノ件は秋津駅、東久留米駅ニ出張ス、田中泰司氏来訪」と記されている。同じ日の「鈴木源一日記」(D3)には、「暁方、強震アリ、驚愕ス、事務所、甘藷堀出し、琢磨、町谷ニ行ク、午後帰宅ス」と記されている。2人の日記から、就寝中の人も驚いて飛び起き庭に逃げ出すほどの強い揺れであったことが伺える。また、諸星日記には「堆肥(糞尿)を秋津(所沢市に隣接する東京都東村山市)や東久留米(東京都東久留米市)へもらいに行ったこと」が、鈴木家日記には「サツマイモを掘り出して町谷(所沢市内)まで行ったこと」が、それぞれ記されている。朝方に地震が発生した後、日中には、道路あるいは鉄道を利用して日常的な生活は出来ていた。

「北田斧吉日記」(D2)は、1923年9月1日の日記と同様に、所沢市教育委員会から提供頂いた翻刻文を基に原本を確認の上、以下に掲載する。

【翻刻文】

今朝六時大地震、九月一日のに多分負けさる程にて皆大ニ驚き外へ跳出セリ、築山ハ表ハ崩れさるも裏手の石掛ハ多分崩れ、最も甚たしきハ三本の石灯籠にて、春日ハ其筈なれども、正面之中段にある雪見ハ甚しく崩れて、蓋も痛み火袋ハ微塵に相成り、欲しひ事をセリ東の中段の白川石のも落ちて痛めり石灯籠の倒れハ九月の時より損害甚しくありたり依て南原杉田謹吾齊藤与助石田辰五郎氏等見舞に来て呉れたり

今朝六時の地震にて譬の如く風と相成れり

これを現代語訳し、要約すると次のようになる。

今朝6時に大地震があった。おそらく9月1日の地震に劣らない程の強い揺れで、皆たいへん驚いて外

に飛び出した。築山は、表は崩れなかったものの、石掛は大方崩れてしまった。最も甚だしかったのは3本の石灯笼で、春日灯笼は当然だけれども、正面の中段にある雪見灯笼は激しく崩れて、灯笼の蓋も破損し、火袋は微塵になってしまった。惜しいことに、東の中段の白川石の灯笼も落ちて破損してしまった。石燈籠の倒れ方は、9月の本震の時よりも損害が甚だしかった。今朝の地震によって、譬のごとく風となつてしまった(9月の地震からの復旧がだいなしになってしまった)。

この日記から、丹沢地震の発生時、所沢市内では少なくとも関東地震本震と同程度の揺れに見舞われたと考えられる。日記の中に、石灯笼の倒れ方に関して「本震よりも損害が甚だしかった」と記されており、本震発生時を上回る強い揺れに見舞われた可能性もある。

4.2 石碑に記されている本震から復旧後に生じた被害

石碑 S3 及び S4 には、関東地震による被害と合わせ、丹沢地震に関する被害についても具体的に記されている。石碑 S3(図 7a, b)には「翌年一月十五日第二回の強震アリテ」、石碑 S4(図 8a, b)には「翌年一月十五日復激震」と、それぞれ記されている。また、これらの各碑文に続けて、石碑 S3 には「氏子等ガ折角ノ辛苦モ水泡ニ帰セリ」、石碑 S4 には「尊像再倒其惨未可状」と記されている。以上の碑文からも、丹沢地震の発生により所沢市内においては、前節で記述したように少なくとも本震と同程度の強い揺れに見舞われた可能性が考えられる。また、関東地震の本震から4ヶ月半の間に、苦勞をして修復したにもかかわらず、再び被災したことへの人々の落胆した気持ちも読み取れる。

4.3 地震の当日発行された新聞の号外

丹沢地震が発生した1924年1月15日、「武州経済通信社」という新聞社が『武州経済通信』号外を発

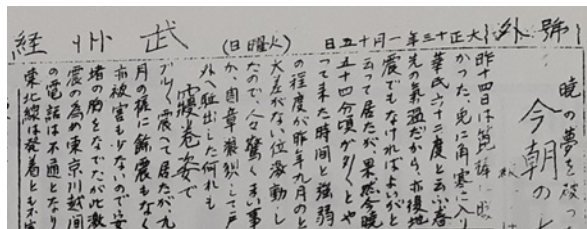


図 11. 『武州経済通信』1924年1月15日号外 (複写版, 部分)

Fig.11 The newspaper extra published in Jan.15 of 1924.

行した(図 11)。「武州経済通信」号外は、1枚の紙面全体が手書きで書かれている。「暁の夢を破った今朝の大地震」という見出しから記事が始まり、地震の震源の推定から、東京・横浜方面や所沢を含む埼玉県内各地での揺れや被害について記されている。

「各地の被害状況」として、現在の所沢市域に相当する「所沢地方」に関して次のように記されている。

▼所沢地方

かなりの激震であった驚いて二階から飛降り、重傷を負ふたもの一人、壁や瓦の落ちた処もあつて川越方面より被害は幾分多いようだ、但し多いと云つても指摘する程大袈裟なものでない

また、現在の入間市(所沢市の西隣)に相当する「豊岡地方」の状況として、「煙突の倒潰したものの一半潰れの家屋三戸神明神社の玉垣崩潰し墓地の石碑が倒れた人畜には死傷はない」と記されている。新聞の一段目(図 11)に記されている「昨年九月のと大差がない位激動した」という記事も踏まえると、前述の日記や石碑に記されている地震による揺れと体感的に震度が近かったことが考えられる。

§ 5. おわりに

所沢市内では、1923年関東地震の本震による家屋の倒壊は無かったものの、寺社の建物や土蔵の壁、石灯笼の破損といった被害を生じていた。埼玉県の三大被災地を含む春日部市・幸手市・川口市と比べると震源に近いにもかかわらず、これらの地域と比較して揺れや被害が小さかったことについては、さらに考察の余地がある。

本震から4ヶ月半程後に発生した規模の比較的大きな余震の1つとされている1924年丹沢地震では、所沢市内において、本震と同程度の揺れかそれを上回る強い揺れに見舞われた可能性が考えられる。前述の三大被災地と比べて本震による被害が小さかったことから、余震による被害が区別できた。多くの建物が、本震後に修復できたばかりのところ再び被災をしたことが、石碑2基(S3とS4)、「北田斧吉日記」(D2)、『武州経済通信』号外から読み取れた。

本研究で閲覧調査をおこなった3家の日記には、1923年9月1日の関東地震及び1924年1月15日の丹沢地震の当日に、それぞれの地震による揺れや被害に関して詳しく記されている。比較的被害が小さかった所沢市内における震災からの復旧や復興の過程、他地域に向けた支援についても記されている可能性が考えられ、3家の日記の調査をさらに進めていくつもりである。

石碑 S3 と S4 からは、本震による被害からの復興を速やかに進めていく過程で、2度目の大地震により再び被災したことにも負けず、地域で協力をし合つて再

復興を果たした力強さも読み取れた。また、関東地震の本震によって倒壊した石鳥居で灯籠を建て、そのことを記した石碑(S6)等、過去に地震によって生じた被害を具体的に後世に伝え、今後の地震にも備えてほしいというメッセージが込められているのを感じた。余震の発生により、本震と同程度の揺れを伴うことも、今後発生する地震に対して留意したい教訓である。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP19H01363、東京大学地震研究所共同利用(2019-G-07)の助成を受け、ひかり拓本の技術を用いることができ、奈良文化財研究所の上相英之氏、東京大学地震研究所の加納靖之氏には石碑調査に同行頂いた。また、公益財団法人武田科学振興財団より「高等学校理科教育振興助成」に採択され、助成金を調査の旅費や文献の購入、文献の複写に充当させて頂いた。北田家、諸星家、鈴木家の日記と『武州経済通信』号外は、所沢市生涯学習推進センターより提供を頂き、木村立彦氏には各資料の収集及び日記の読み取りと現代語訳をご指導頂いた。東京大学地震研究所の馬場道人氏には、日記の崩し字の読み取りと解説をご支援頂いた。匿名の査読者及びご担当頂いた編集委員の白石睦弥氏からは、本稿を改訂する上でたいへん有意義な助言を頂くことができた。栄東中学校の藤井聡氏には本研究で調査をした日記の解説を、Lawrence A. Dow 氏には英文の校正をご指導頂いた。本校理科研究部員の佐藤弘康氏には日記の解説及び原稿の校正を、島村泉里氏には図の作成及び原稿の校正を、遠藤匠人氏と林春太朗氏には原稿の校正をご支援頂いた。記してお礼申し上げます。

対象地震：1923 年関東地震、1924 年丹沢地震

文献

- 荒井賢一・小林優介・竹原輝・高木駿・山浦照良・安倍聡志・北廣創史, 2017a, 埼玉県春日部市に残る 1923 年関東地震に関する石碑, 歴史地震, **32**, 77-86.
- 荒井賢一・小林優介・竹原輝・高木駿・山浦照良・安倍聡志・北廣創史, 2017b, 埼玉県春日部市に残る 1923 年関東地震に関する記録 ～大震災記念児童文集と大正 12 年粕壁町震災写真帳～, 歴史地震, **32**, 103-106.
- 荒井賢一・篠田海遥, 2019, 埼玉県川口市に残る 1923 年関東地震に関する記録, 歴史地震, **34**, 185-196.
- 石黒喬大・荒井賢一・西山享佑・安倍聡志・平原優美・増田滉己・浜橋一徳・齋藤隆・木村円香, 2014, 埼玉県さいたま市に残る 1923 年関東地震に関する石碑, 歴史地震, **29**, 111-128.
- 石黒喬大・荒井賢一・小林優介・西山享佑, 2015, 埼玉県さいたま市に残る 1923 年関東地震に関する石碑その 2, 歴史地震, **30**, 139-148.
- Kanamori, H., 1971, Faulting of the Great Kanto Earthquake of 1923 as Revealed by Seismological Data, Bulletin of the Earthquake Research Institute, **49**, 13-18.
- 諸井孝文・武村雅之, 2002, 関東地震(1923 年 9 月 1 日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定, 日本地震工学会論文集 第 2 巻, 第 3 号, 35-71.
- 篠田海遥・野間鉄心・荒井賢一, 2018, 『幸手町のかたりべ』に記された埼玉県幸手市における 1923 年関東地震, 歴史地震, **33**, 220-236.
- 武村雅之, 1999, 1923 年関東地震直後の 2 つの大規模余震 - 強振動と震源位置 -, 地学雑誌 Journal of Geography, **108** (4), 440-457.
- 武村雅之・諸井孝文, 2002, 地質調査所データに基づく 1923 年関東地震の詳細震度分布 その 2 埼玉県, 日本地震工学会論文集 第 2 巻, 第 2 号, 55-73.
- 所沢市教育委員会文化財保護課, 2001, 所沢市石造物調査報告 2 三ヶ島の石造物, 179pp.
- 所沢市教育委員会文化財保護課, 2002, 所沢市石造物調査報告 3 柳瀬・松井の石造物, 205pp.
- 所沢市教育委員会文化財保護課, 2003, 所沢市石造物調査報告 4 山口・吾妻の石造物, 307pp.
- 所沢市教育委員会文化財保護課, 2004, 所沢市石造物調査報告 5 小手指・新所沢・並木の石造物, 259pp.
- 所沢市史編さん委員会, 1992, 所沢市史 下, 719pp.
- 上相英之・多仁照廣・蛭名裕一, 2019, 判読可能な津波碑文画像の取得方法の提案, 歴史地震, **34**, 258.
- 宇佐美龍夫, 2003, 最新版 日本被害地震総覧 416-2011, 605pp.